

## 「わたしらしさ」としてのボランティア

新 矢 昌 昭・渡 邊 秀 司

### 要 旨

本稿は、インタビュー調査の分析によって、ボランティアにおいて人々はどうにアイデンティティや自分探しを行い、その人々にはどんな特徴がみられるのかを考察したものである。アイデンティティや「自分探し」は「わたしらしさ」を確かにする重要な要素であるが、その「わたしらしさ」を確立してゆくプロセス全体を詳しく把握することは困難である。このことから、ここでは「自己物語」論を採用し、「わたしらしさ」の形成過程を示す可能性をもつ「自己物語の書き換え」と呼ばれる側面に注目した。

キーワード アイデンティティ、「自分探し」、「わたしらしさ」、自己物語、自己物語の書き換え

### はじめに

本稿の目的は、ボランティアにおいて可能とされているアイデンティティの確立や「自分探し」とは、どのようにしてなされるのかをインタビュー調査の分析を通して考察することにある。現在、ボランティアにおいてアイデンティティの確立や「自分探し」ができることが実にさまざまに語られている。例えば次のように。「自分探し」、「ボランティア活動の基盤発展は、ボランティア活動が自らのアイデンティティを発見し、活動することが相互の互惠主義の確立になるのではないのでしょうか」(リファレンス 2003)。また、『「自分探し」の旅に出かけよう!』というタイトルを付け、次のようにボランティアを紹介している。「自分にどんな活動ができるだろうと考えたら、自分の日常や自分のこれまでの生き方を振り返ることができます。そして、活動を始めると、自分自身と向き合い、見つめ直すことができます」(平群町社会福祉協議会 2003)。もちろんすべての人々が、アイデ

ンティティの確立や「自分探し」(以下「わたしらしさ」とする<sup>1)</sup>を求めてボランティアをしているわけではない。だが少なくともボランティアにそのような可能性があるとされていることは、その魅力の一つとしてボランティアが存在し、「わたしらしさ」を求めて参加している人がいることが考えられる。では、何故ボランティアにおいて「わたしらしさ」の形成が可能とされるのだろうか。また、「わたしらしさ」の形成が可能になった人々には、どのような特徴が見られるのだろうか。

そこで、まずはインタビュー調査の分析の前提としてアイデンティティと「自分探し」の用語について整理し、そしてボランティアの考え方からどのようにして「わたしらしさ」が可能とされるのかを考えたい。それから、インタビュー調査の分析を通してボランティア参加者の「わたしらしさ」を考察する。その際、「わたしらしさ」のアプローチには「自己物語」論が有効であると思われる。自己物語論が有効であるのは、人間は「わたし」を物語の形式を用いてしか表現できないからであり、「わたしらしさ」

は「わたし」の「物語」、すなわち自己物語であると考えるからだ。従って、ボランティアにおける「わたらしさ」の形成は、ボランティアを自己物語として生きることと位置づけることができると思われる。

## 1 「わたらしさ」

アイデンティティや「自分探し」とは「わたし」に関わることである。このアイデンティティと「自分探し」とは何だろうか。そして両者は「わたし」にどのように関わり、どのような関係性を持っているのだろうか。

アイデンティティは、単純に意味を示すことはできない。何故なら、ナショナルアイデンティティやエスニックアイデンティティ、セクシュアルアイデンティティなどアイデンティティはさまざまな意味をもって使われているからである。では、そもそもアイデンティティとは、何であろうか。このアイデンティティの用語を世の中に広めたのはE・H・エリクソンである。しかしながら、エリクソン自身はこの用語をさまざまに使い明確に意義づけられているわけではない。ただ、彼の言うアイデンティティとは、二つの側面から形成されていると思われる。第一は、心理的・社会的にアイデンティティが確立される考えである。

心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの間の全ての相互作用は、一種の心理社会的相対性としてののみ概念化されうるものであり、アイデンティティの確立はそのような相互作用によって原型としての重要性をもっているのである（エリクソン 1973a：16）。

さらに、別のところでは「心理的・社会的」によって形成されるアイデンティティを次のように説明している。「心理社会的アイデンティティは、主観的であると同時に客観的であり、個人的であると同時に社会的であるという特徴

をもつ」（西平 1993：206）。

そして第二は、アイデンティティが人間の発達段階の形成過程の中で形成されることである。とりわけ、青年期という「アイデンティティのさまざまな構成要因（中略）を統合するための猶予期間<sup>1)</sup>」で形成される（エリクソン 1973a：167）。また青年期の「アイデンティティとは、（否定的なものを含む）すべて以前の同一化〔自分にとって重要な影響力を有する人との一体感または同一視〕や自己像の統合を意味」する（エヴァンス 1981：44）。しかしエリクソンが「アイデンティティとは、パーソナリティ特性とか、または、何か静態的で不変なものの形をした『成果』として『達成』されるようなものでは、決してない」としている（エリクソン 1973a：17）。しかしこれには注意しなければならない。つまり、アイデンティティはライフサイクルの中での児童期から成人期の間に位置する青年期において確立しなければならない課題なのであり、他者関係によって成立する。そしてアイデンティティは青年期において固定化されることではなく、発達とともに変動するのである。

このように、アイデンティティとは、個人の発達段階において心理的、発達の、主観的、個人的、という個人の内面性に関わるものと、社会的、歴史的、客観的、他者という個人の外面性との相互作用によって形成されるのであるが、それは一定ではなく変化していくのであると言える<sup>2)</sup>。

では、ここで触れる「わたし」としてのアイデンティティとは何であろうか。それは、エリクソンの言う「自我同一性」（ego identity）が近似すると言えよう。自我同一性とは「時間的な自分の自己同一 self-sameness と連続性 continuity の直接的な知覚と、他者が自己の同一と連続性を認知しているという事実の同時的な知覚」である（エリクソン 1973a：10）。更にエリクソンは、この「自我アイデンティティ」

と「自己アイデンティティ」とを区分している。

自我の総合化能力をその中心的な心理社会的機能に照らして議論するとき、ひとは自我アイデンティティについて語りうるのであり、また、個人の自己イメージと役割イメージとの統合を論議しているとき、ひとは自己アイデンティティについて語りうるのである（エリクソン 1973b：294）。

しかし西平直が指摘するように、エリクソンはこの両者の一致をアイデンティティとすることもあれば両者を「自我アイデンティティ」とすることもあり、エリクソン自身が十分整理していない（西平 1993：256）<sup>3)</sup>。このようにエリクソンのアイデンティティは難解であり、簡単に定義することを許さないものである。だからこそ様々にアイデンティティは概念付けられていると言えよう。例えば、石川准は、多様化する役割や関係などにおいて他人と区別する「わたし」らしい独特な全てがアイデンティティを構成する。複雑な「わたし」を取り巻く環境や状況の中でも「全部をひっくるめたものが『わたし』だ。要するに『わたし』とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束だということ」であると言う（石川 1992：14）。また大場健は「社会的な役割を表わす言葉による、自分で納得のいく自己定義」とする（大場 2001：12）。ただ、ここでは次のようにアイデンティティを考えておきたい。社会、他者との関係性の中で「わたし」自身を確認することがアイデンティティである。従って、アイデンティティとは社会に対する役割とそれに対する自己のイメージとを一致させた「わたし」を、社会の中での他者によって認められることによって、一貫した「わたし」を安定させることである。簡単に言えば、役割関係に一致した「わたし」を他者に承認してもらうことで「わたしらしさ」を形成することがアイデンティティである。またアイデンティティは近代的な個人に要請されるものでもある。近代的な個人は、「わたし」

という存在のすべてを、自分自身の自由な意思で選びとり、つくりあげてゆかなければならないということをも意味するからである（若田 1997：68）。

次に「自分探し」は、1980年代後半から社会的に顕著になった言葉である。芳賀学は、「自分の中には何か『現状の生活』にはあらわれていない『本当の自分』（可能性）というものがあり、それこそが『自分らしい』生き方」を探すことであると言う（芳賀 1999：31）。また香山リカは、「こころ」「私」というものが「どこかに確固たるものとして、ひとつだけあるもの」で、もしそれらがひとつのまとまりとして存在していないと思う人は、「何とかして一刻も早くそれを見つけなければならない」メッセージであるとする（香山 1999：28）。ここから「本当の自分（わたし）」を探す「自分探し」とは、「いま」の自分には満足できず、どこかにある「わたしらしさ」を探そうとする試みだと考えることができる。

以上からアイデンティティと「自分探し」に共通して言えるのは、「わたしらしさ」の形成であると言えよう。では、この両者はどのように関係しているのであろうか。それは、アイデンティティの持っている意味が危機を迎えることによって、「自分探し」が顕著になってきたことにあると思われる。そもそも用語としてのアイデンティティの持つ意味は、社会的な役割を他者との関係の中で一貫した「わたし」を「わたし」で確認していくことであった。しかし現代の多様化した社会では、一貫した「わたし」を社会の中や他者によっては見出しにくい。何故ならば、多様化している社会の中では、「わたし」は余りにも多くの役割を負わなければならないからだ。そこからは役割に対しての「わたし」をすべて一致させることができない「わたし」がいることになる。そうするとアイデンティティが課している一貫した「わたし」は、困難さをともなうこととして受け取られる

であろう。アイデンティティという用語は、一貫したアイデンティティを確立しなければならないと「わたし」に課することで、確立できない「わたし」を焦燥的に追い詰めてしまうのである。アイデンティティが不可能であるとうすうす気付きながらも、「なおわたしたちは自分の中の空洞を埋めるために、これがわたしだと主張できるような何か、何でもいい何かを見いだしたい、と願わずにはいられない」のである(若田 2002: 138)。

この結果、現代の社会で顕著になっているのが「自分探し」という「わたし」への問いであると思われる。そのことは、「アイデンティティ探し」と言わないで「自分探し」が叫ばれている今日の状況から伺える。「わたしらしさ」はアイデンティティではなく、「自分探し」へとシフトしているのである。「自分探し」には、「わたし」には役割はあるが、しかしそこには「本当のわたし」がない。この役割の「わたし」ではない「本当のわたし」とは何かという問いがある。一貫した「わたし」がこの世界の中で位置づけることができないと、いまの「わたし」とは異なる「本当のわたし」がどこかにいるように思えるのである。「自分探し」とは、アイデンティティを確立できずにいる不安ないまの「わたし」ではなく、なおもアイデンティティを確立できるかのような「本当のわたし」という「わたしらしさ」を探し当てることである。従って、アイデンティティと「自分探し」との関係に共通して言えるのは、「わたしらしさ」の形成が目指されていることであるが、「自分探し」は「わたしらしさ」をアイデンティティでは満たすことができない「わたし」が、更に「わたしらしさ」を形成することを目指すことである。このことから、「自分探し」はアイデンティティを深めたと言える。しかし、そのような「自分探し」の問いを重ねても答えは無い。そこにあるのは「本当のわたし」ではなく焦燥感を抱いた「わたし」でしかない。「ほ

んとうの自分」がまずあって、それが他人にさまざまに写るというのではない。自分で見えない自分と他人に見える自分とを統合していくことが自分である。『ほんとう』の自分とは、じっさいには『こう映ってほしい』自分の姿でしかないからである(大庭 2001: 113)。更に言えば、この「本当のわたし」自身を実感できないのは、そもそも空虚だからである。浅野智彦の言うように、現代の社会において唯一の「本当の自分」という固定化された「私」から、いくつもの「私」、複数の「私」へ、たった一つを中心だった「私」はいくつもの中心へと散らばっていつている。そうした中でその答えの基準となるのが「本当の自分」をどのように扱うかという点であったのだが、しかし未だに「本当の自分」を価値あるもの、当然獲得することという社会規範が根強くよく残存している。その結果、「本当の自分」という言葉は、目指すべき価値として欲望を喚起し、人をつき動かすものでありながら、その内実は全くの空虚であるような奇妙な記号となる。つまり「本当の自分とは何なのか?」という問いは、たえず人を誘って答えを出すように促すが、実のところその答えは空白であり正解は存在しないのである(浅野 1999: 51-2)。

しかしアイデンティティや「本当のわたし」という問いから人は自由になることができるのだろうか。恐らく、この「本当のわたしとは何か」という問いをすること自体は、浅野の言うように空白なのであるから、この問いはこの答えを巡る問いへと繰り返し永遠に止むことがないであろう。ありもしない「わたし」の答えを探すことを永遠に求めていくことになるからだ。これはアイデンティティが、依然として変容されず「わたしらしさ」として使われている結果であると思われる。そしてアイデンティティから「自分探し」へと移行しても、答えの無い「本当のわたし」としての「わたしらしさ」の形成は依然として難しい。つまり、「本当のわ

たし」という問いは、アイデンティティの補完を担われているのであるが、ここでも「わたしらしさ」の形成は実に儚いのである。

このように考えると、アイデンティティも「本当のわたし」も「わたしらしさ」という幻想があると言えよう。その両者が幻想であるのは、社会が多元的になってしまい自らが分裂してしまうことになりかねないのにも関わらずに、近代的な個人としてなおもアイデンティティを要請されるからであり、そして「自分探し」は「本当のわたし」という答えのない答えをあるつもりで捜し求めるからに他ならない。「わたしらしさ」とは幻想であるにもかかわらず、確かな「わたし」として「わたし」が思い込みたいという欲望である。では、「わたしらしさ」という幻想を、確かな「わたし」として思い込むとはどのようなことなのか。それは、他者の視点である。「わたし」にとって、「わたしが〈わたし〉でありうるためには、わたしは他者の世界のなかに一つの確かな場所を占めているのでなければならない」（鷺田 1996：119）。このようにして「わたしらしさ」という幻想を、他者との関係によって「わたし」は確かなものとして思い込むことができるのである。

以上から考えると、ボランティアにおける「わたしらしさ」は、ボランティアの場を通じた他者によって形成できることにあって考えられる。そこで賞賛する側は他者によって「わたしらしさ」を形成することができることから、ボランティアによって他者と交わり、その中で発見できるとしているのではないだろうか。

## 2 ボランティアにおける

### 「わたしらしさ」の位置づけ

では、そもそもボランティアにおいて「わたしらしさ」の形成が、何故可能とされているのであろうか。それを若干の先行研究から検討してみよう。入江幸男は、ボランティアの捉え方

として、チャリティー、自己実現、社会参加を挙げている。ここではアイデンティティと関わる社会参加のボランティアを取り挙げてみよう。入江が社会参加のボランティアで強調するのは、ボランティアを社会的に位置づけるための公共性である。この公共性とは、ボランティア活動が市民の相互承認と自立的な問題解決を図るという新たな「市民的公共性」を意味している。そして公共性の必要性は、われわれが「見られ、聞かれ、批判される」ことを通じて公的に認められ、自他共にアイデンティティを認められるからだと言う（入江 1999：5-16）。ここから伺えるのは、アイデンティティは公共性を持っているボランティアをすることによって確立が可能となることである。このような考えは、他にも見られる。例えば、吉村恭二も現在のボランティア活動に参加するのは、多くの人々が『『自分』を問い、意味のある生き方を求め始めている』からだと言う。そしてボランティア活動に参加する意味は、「困っている人のため」だけではなく「自分の潜在能力」を発揮し、他者や社会との関係の中で、「自分の位置を発見すること、つまり自己の人間としての可能性を発見する喜びにある」としている（吉村 1999：42）<sup>4)</sup>。

以上のようにボランティアを行うことで、「わたしらしさ」が再発見できるとされており、その前提とされているのは「わたし」と他者や社会との関係による相互作用である。正しくこのことは、「わたしらしさ」を形成できる条件をボランティアが示していると言えよう。では、「わたしらしさ」をボランティアの中で形成できるとされるのは、実際にはどのようなことなのだろうか。この形成に有効な視点は自己物語論であると思われる。以下では、実際にボランティアを行っている人々に行ったインタビューから、「わたしらしさ」の形成がボランティアの中でどのようにしてなされるのかを自己物語論の方法を通して考察してみたいと思う。その

前に自己物語論とは何かをみておこう。

### 3 自己物語論の射程

自己物語は、文字通り自己＝「わたし」の物語であり、「物語論」のアプローチを用いた自己論である。では、何故「わたし」が物語なのだろうか。そこで物語（論）と自己物語の特徴を抑えておこう。

物語と言っても一概に概念を提示することは難しい。何故なら、さまざまな分野で展開されており、論者によって実に多様であるからだ。ここではおおよその物語の共通理解を抽出し、整理しておこう。

まず、第一に全体としての物語は、井上俊の言うように「物語とは現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したもの」である。そしてこの「叙述」には「記述」と「説明」が含まれ、この記述と説明はそれぞれストーリーとプロットに区分できるとする（井上 1996：21）。この井上のストーリーとプロットはE・M・フォスターの『小説の諸相』からのものである。フォスターはストーリーを「時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの」とし、プロットもストーリーも時間の進行に従って事件や出来事を語ったものであるがプロットは「それらの事件や出来事の因果関係に重点が置かれます」と言う（フォスター 1994：129）。ここから、物語はプロットという因果関係によって出来事というストーリーが時間的に配列されるものということができる。

このストーリーとプロットという区別はまた物語の「語り」と「物語」に近似していると思われる。野口祐二は、物語（narrative）を「語り」と「物語」に区分し、前者は、「誰か向かって何かを語ること、および、その語られた内容一般を広く指し」、後者は「さまざまな出来事や思いをつなぎ合わせてなんらかの結末へ

と向かうお話」であるとする。しかし両者は区別される関係であるが、同時に区別されない関係でもある。何故ならば、文字化されなかった時代においては「語り」が「物語」であり、また自分史のような「物語」は、その自分史に沿った「語り」をするからである。すなわち、『語り』と『物語』のこうした相互的かつ連続的な関係を一言であらわす言葉、それが、『ナラティヴ』という言葉なのである」と言う（野口 2002：20-2）<sup>5)</sup>。このように野口は、物語をナラティヴとして区別しているが、それは「語り」と下位の「物語」を区分するためであろう。ただし野口の「物語」では、相互的連続的なことを示しているので、一作品としての物語には該当しないことから後に述べる「生きた」物語のみ有効となろう<sup>6)</sup>。

第二は、物語が始点・中間・終点という時間軸にそった出来事の選択的構造化にある。すなわち、無数にある出来事の中から意味のあるものだけを選択し配列するということである。更に、この配列と選択は終点からなされている。何故なら、終点の納得のいくように始点・中間が配列されることから物語の終点こそが始点・中間を選択するからである。

第三に、物語は他者に向けて伝達されることをめざす。「というのも語られた構造の全体が結末を納得のいくものとして導き出しているかどうかは、最終的にはそれを聞いた他者がその物語を受け入れてくれるかどうかによって判断されるほかないから」である（浅野 2001：207-8）<sup>7)</sup>。

以上から物語とは、「物語」としての「語られたもの」と、「物語り」としての「語り」との両者の相互作用から構成されるのである。そしてある出来事を現在という時間の支点から因果関係的に時間的に配列・選択しまとめたものであり、他者に受容されることによって完成するものである。だがここで注意しなければならないのは、作品としての完成した物語と実際の

自己物語にみる「生きた」自己物語では違うことである。「生きた」物語は、完成というものがないからである。つまり、「生きた」物語の「物語」と「語り」は、相互関係をし続けるからだ<sup>8)</sup>。従って物語に注目するのは、人間はこの様な物語の形式を生きる存在に他ならない。人間は物語を作成しつつ人生を生きているのである。それが自己物語である。

文字通り自己物語は「わたし」という存在が「物語る」、「わたしという物語」であるということができよう。では、自己物語はどのような特徴をもっているのだろうか。ここでは、物語と自己との関係に着目し自己物語として社会学的に展開している浅野智彦の考えに注目したい。

浅野によると、「わたし」＝自己とは、「自分自身について物語る」ことを通して生み出され、そして第二に自己物語は「語り得ないもの」を前提とし、隠蔽していると言う。前者の自己が自己物語によって生み出されるということは、エピソードの選択と配列を通してはじめて「わたし」が現れることである。すなわち「私」がいて、次に「私」について私が語るというのではない。そうではなく、自分自身について語るという営みを通してはじめて「私」が生み出されるのである。後者の「語り得ないもの」とは、首尾一貫した自己物語でも「この語り得なさ」が付随していることである。従って、一見一貫した自己物語は、その背景に非一貫性が潜んでいることになる。この非一貫性が何故潜んでいるかと言えば、自己物語の構造に求めることができる。自己物語とは、「人が自分自身について語る物語」であるが、そこでは「私が私について語る」という構造を持つ。従って、この時のこの「私」は、二つの位置（私が／私を）同時に占めていることになる。そして、ここでの「私」は同じ「私」である同一性と異なる場所におかれている差異性との間で引き裂かれているのである。この二つの私の位置とは、自己物語が語り手としての「私」と登場人物としての

語られる「私」の視点は異なっていなければならないことであるが、一方で、語る「私」と登場人物としての「私」とは、自己物語の結末において一致しなければならない特徴を持つことを意味している。もし二つの「私」が完全に一致したならば、もはや語りは起こりえないであろうし、完全に差異化するならば、それはもはや「自己」物語ではありえないからである。つまりこの二つの「わたし」という物語の構造の中に、選択されなかった「語りえないもの」が存在するのである。では、「語り得ないもの」の非一貫性はどのようにして解決され、物語は一貫性を持つことができるのであろうか。それは、非一貫性にもかかわらず自己物語が語り手である「私」をそれなりに一貫した存在として生み出していくとするならば、「語り得なさ」が何らかの形で隠蔽されていなければならないことにある。そこで重要となるのが「他者への伝達」である。他者<sup>9)</sup>へ物語を語ることは、相手を納得させねばならない。納得させることで「語り得なさ」の隠蔽が行われるのである。語りが部分的に一貫性を欠き、全体として真偽が未決定であったとしても、聞き手に対して隠すことができた時に自己物語は納得のいくものとして受け入れられている。このようにして自己物語が他者によって受け入れられている限りにおいて、あたかも「語り得なさ」など存在しないかのように物語は進み、語り手の「私」もあたかも安定した同一性を備えているかのように自己物語は現れてくることになる（浅野 2001：7-21）。

浅野の自己物語は、他者の視点を重視しているために、「物語り」→「語りえなさ」→「他者」の視点による「隠蔽」によって形成される。つまり、物語のもつ「物語」が「語り」と「他者」によっていかにして形成されるのかという視点に立っている。このように「わたし」という存在は、自己物語を通して現れる。従って「わたしらしさ」は「語り」と「物語」の相互

作用が他者に受容されることによって形成され、完結されていないが現時点では完結されているかのような「生きた」自己物語を通して形成されるのである。そしてこの物語が相手に伝え受容されることによって自己物語は完結する。また自己物語の形成過程は様々な筋やプロットが選択されるのであるが、選択されなかった筋やプロット、つまり「語りえないもの」は隠蔽され自己物語は完成するのであるから、筋やプロットを変えることで自己物語は変化する可能性がある。しかし、この自己物語は幻想の域を出ない。何故ならば、この自己物語は「わたし」が「語る」ことによって「物語」が作成されていくわけであるが、そこには客観性がそもそも存在しないからである。つまり、物語では「『2つ以上の出来事が、どのように関係づけられて陳述されるか?』が問われ、出来事がどのような意味連関でむすびつけられるかが問われ」るからである（やまだ 2000:20）。だから、自己物語は他者に受け入れられることによって完成するのであるが、そこで問われるのは妥当性を持つのかどうかにある。以上から、「わたしらしさ」は自己物語そのものだと捉えることができるが、この自己物語はこれを受容してくれる他者の存在に大きく左右されるのである。このことから「わたしらしさ」の形成が困難であるということは、この重要な他人が見出せないか、或はまた他人ではなく「わたし」自身で完結してしまう結果である。

#### 4 ボランティアにおける 「わたしらしさ」の形成の事例

では実際にボランティアは「わたしらしさ」にどのように寄与しているのだろうか。それはボランティアを自己物語の中に組み込み、位置づけていくことだと思われる。つまり、ボランティアを通して「わたしらしさ」という物語を生きていることである。以下これをインタビュー

から明らかにしてみたい<sup>10)</sup>。その際、特に注目したいのが「自己物語の書き換え」である。自己物語の書き換えとは榎本博明によると、これまでの自己物語が現実の人生との乖離が著しくなると、自己物語の改定が必要となり自己物語が解体する。「そこで、過去のさまざまな経験のもつ意味の再点検が行われ、現在の状況によりふさわしい自己物語の構築がめざされる」ことである（榎本 1999:37-8）。自己物語の書き換えに注目することによって、これまでとは異なる「わたしらしさ」がボランティアにおいて形成できたのか、そうでないのかが明らかになると思われる。自己物語の書き換えに注目することによって、ボランティアで言われているアイデンティティの確立や「自分探し」が可能であるのか不可能であるのかが明らかとなる。従って、ボランティアにおいての「わたしらしさ」の形成は、この自己物語の書き換えに関わっている。逆に言うところの自己物語の書き換えが生じなければ、ボランティアにおいて「わたしらしさ」を実感することは難しいであろう。

インタビューは、H市にあるSという外国人支援ボランティア活動に関わっている学習指導者数人を対象として、2003年8月から9月にかけて行った。Sは現在12名の指導者と27名の学習者よりなっており、活動は日曜日ごとに開催している。ここでは以下、インタビュー結果から自己物語の書き換えが見られると思われる箇所を「ボランティアのきっかけ」「ボランティアをして自分が変わった点」としてまとめ分析を加えた。なおインタビュー対象者の属性は2003年でのものである。

##### 【事例 Aさん】

Aさんは現在、53歳の男性で、H市に在住している。このボランティアには今年の4月から開始している。



### ●ボランティアのきっかけ

外国人のボランティアをやってみたいと思ったのは、ひとつはね特殊というか体の都合で。商売、小売店ですから本当は定年も無いんですけども、ずっと仕事をしながら人も使っていましたからね。今はしていないんですけど。去年一年間は入院、入退院を繰り返したもので「闘病と商売を両立していくことは難しくなるかな」と甥に商売を譲ったんですね。それは規定の路線で、そのつもりで甥も3年程前から一緒に商売をやっていたから。だから商売を譲って、闘病に専念するということで家にじっとしているということになった時点で、何かぼうとしているだけではいかんのでなんかできることね。金儲けはできんから、ボランティアでもと言えば失礼でやけど。という意味でいろいろ気を配っておって、広報でこういうことを見つけて。

それともうひとつは学校が外国語大学を出ているもんですから、もともと外国語というのに興味がありますし。旅行とかね。外国人と接するのは嫌いじゃありませんし。Mセンターでもだいぶん付き合いがありましたから。そういう意味でもいい仕事というか「ボランティアだなあ」と思って、やらしてもらっているんですけどね。

### ●ボランティアをして自分が変わった点

変わったというか、やっぱり日曜日のこの時間になれば、やっぱりこれに参加しているから行かなければならないというか、日曜ではこれだと、火曜と木曜はセンターへ行くんだと。そういう意味であのう、まるっきり無職やけども、そういう意味ではメリハリはつきますわね。そういう意味ではすごくいいですけど。そういうのがなければまるっきりぐうたらぐうたらしているだけで。そういう意味で生活のリズムに役立っているし、まあ時間つぶしというてはあれやけど。それとやっぱり今になって、そういう新しい発見というのがいろいろありますからね。

そういう意味でもいいし。そしてまあ、仕事を離れて人と接する機会というのが当然狭められていますから。だからそういうところやこういうところへ行って、職員の人と喋ったりとか、いろんな人と、人と会う機会も増えるし、そういう意味で自分の刺激にもなるし。そして多少は役に立っているのかなあという満足感もあるし。なにもせんと寝転んでいるよりも、やっぱりいいんじゃないかな。ということかなあ。

Aさんには、自己物語の書き換えが見られる。またBさんも同様に見られたので、まとめて考察する。

### 【事例 Bさん】

Bさんは、H市に在住している、62歳の男性で、当初から参加されているボランティアの中心メンバーの一人である。

### ●ボランティアのきっかけ

ボランティアを（前から）しようと思っていました。会社も長いこと勤めていましたので、これからは無理して仕事を探してやるよりは自由に、残された時間を、今まで会社でやっていた経済的なことよりも、少し変わった分野を出来たら良いなあと思って、ボランティアの講座に参加していたのです。その中で一つVという養成講座を受けまして、それを受けたのがきっかけですね。他にもありましたがこれに絞りました。

### ●ボランティアをして自分が変わった点

指導者が、来てくれることにに関してありがたい。よく来てくれる。日曜日、今まで、働いている時は、全然ボランティアをやってこなかったのに、若い人は、若い時から、働きながら、日曜日をボランティアのために来てくれるという、ありがたいなという感謝の気持ちを持つようになった。だから自分も、時間をとられても

優先してやるようになったことが変わったと言えば、変わったことかな。われわれが出来なかったことをやろうとしてくれているのだから…。

Aさん、Bさんの事例から共通して言えることは、定年という人生の転機がボランティアへの参加動機となっていることである。このことを自己物語の視点から言ってみれば、これまでの会社を中心にした自己物語からボランティアを中心とした自己物語への書き換えである。しかしながら、こうした人生の転機を感じないでボランティアをしている人には、このような自己物語の書き換えは見られなかった。

#### 【事例 Cさん】

Cさんは、21歳の女性、O県出身のS県立大学の四回生である。このボランティアには今年の3月から参加している。

#### ●ボランティアのきっかけ

今までクラブ活動とかバイトとかをやっていた時間がボランティア活動に変わったと言うことです。クラブ活動とかしてたら休みたいので、休みの日は休みになるので。今は他の日が休みなので日曜日にボランティアをしています。参加しようとしたきっかけというのは、なんかの募集を見てなんですけど、外国の方と接してみる、向こうの文化を知ること出来るだろうし、興味もあったからです。

その外国人の方と接する良い機会だというのは、外国に行ってみたくとか、外国の文化とか習慣とかを直接見たりとか聞いたりとかに興味があるからです。

またボランティアをやろうと思ったのは、向こうに行ってまで将来就職しようとは思わないんですけど、身近って言うか、近くで話せたりとか出来るから。だからボランティアって、そんなに経験とか技術とかいいですよ、これからやっていけばいいということだったので始めた

んだと思います。しかし今ボランティア活動をしています、「ボランティア活動してる」って意識はあんまりないです。

#### ●ボランティアをして自分が変わった点

あんまりないです。自分の日本語を気をつけるようになったくらいで。あんまりそんなに変わったことはないですね。他は、そんなに。でも日本語をもう一度、何気なく使っている言葉をもう一度勉強というか、復習というか。くらいですかね。

このようにCさんの事例では、ボランティアをすることで自己物語の書き換えが見られない。恐らくCさんが大学生という物語を中心にして生きているからであろう。このような答えは若い人ばかりではない。次のDさんの事例からも伺うことができる。

#### 【事例 Dさん】

Dさんは、H市に在住している56歳の女性で、このボランティアには今年の二月から参加している。

#### ●ボランティアのきっかけ

以前ね、ケミカル工場に外国人の労働者が正規で入ってきて。それでまったくね誰も英語が話せなくて、フィリピンとかだったんですけど。それで困ったんですね、会社が。それでそういう方法が分からなくて。日本語の指導講座がありましたんで。それでこうちょっと（行きまして）。で、移行したのは、そのまま引き続きこちらにと言われましたんで、そのままずっと。また主人が亡くなりましてね、日曜日が本当に暇な時間が多いものですから。他は全部つまっている。ボランティアの他にも、仕事は宅建主任者をしてるんですね。ある会社の。

### ●ボランティアをして自分が変わった点

余り負担にならなくなってきました、造作がね。大変じゃないですけど。変わってきたのかどうか。最初は、やっぱりボランティアをしますという感じではなかったのかな。自分でね。楽しみながら。

Dさんにもボランティアにおいて自己物語の書き換えは見られなかった。Dさんは現在、家庭から解放され<sup>1)</sup>自身の職業に自己物語の中心をおいているからであると思われる。

このように「わたしらしさ」の形成がボランティアにおいて可能となるのは、ボランティアにおいて自己物語の書き換えが起こるかどうかに関わっているのである。AさんBさんは自己物語の書き換えが見られた事例である。だからこそボランティアに対して積極的な位置づけが見られるのであろう。しかし、自己物語の書き換えが見られなかったCさん、Dさんには、ボランティアにおいて「わたしらしさ」の形成を見出すことができない。従って、ボランティアにおいて「わたしらしさ」が形成されることは、必ずしも可能ではないと言える。次に、ボランティアと「自分探し」についてのインタビュー結果を掲げ、仮説的に分析してみよう。

### 【事例 Aさん】

それは当てはまるとは思いますけどね。その自分の位置というか、自分の存在価値というか、存在理由とか、そういうのは例えば、家族の中で、あやふややというか、さっぱりわかっていないというか、まあ自分に自信がないというか、という意味で、どういうんかな孤児さんみたいウロウロしているわけですわな、若い子が。「自分探し」している子は。そう意味で例えば、自分は目も見えないし、こうやって喋れ、指も五つあって動くし、足も動くし、自転車にも乗れるし、本は読めるし、なんでもできると。それが当たり前やけど。それがでも、目の悪い人に

とってみたら、とにかく「こういう見える世界はないんや」とか、耳の悪い人にとっては「音がないんや」とかね。そういう自分が経験できない世界というか自分にとっては当たり前のものが当たり前でない世界というかね。自分にとって当たり前でない世界が、ある意味で当たり前の人もたくさんいるということを知ることはずごく大事やと思いますけどね。だから特に、そのハンディキャップを負っている人の立場に立ってものを考えるという視点をもつことは大事やと思いますけどね。

### 【事例 Dさん】

もしかしたらボランティア始めたことが自分の天職だみたいなことが、「ああ、これだ」というものが見つけれられる人がいるかも知れないですけども。自分はどうなんでしょう。私の経験がまだボランティア一個しかしてないし、ボランティアがどんなものなのかっていうことは、今の自分の活動でしか。他の人が、どういうことでヤラれてるだとか、そういう概念じゃないですけど、そういうのとか知らないで、今その自分がやってることしか知らないで、「自分探し」に繋がるかどうかはちょっと違うじゃないかなとは思いますがね。私は別に「自分探し」ではないですね。「自分探し」については、今の時期、就職活動であつたりとか、次のところに行く時期なので、自分を見つめ直す、自分が何になりたいのかとか、就職はどうしたいかっていう、考えるときに、やっぱりちょっと「あーどうなんだろう」と思うときがあるので、ちょっとその、わかるような気がするんですけど。そうですね、だから、結局は自分で答えを出すので、他に求めてもどうかなあと思いますね。でもわかる気はします。

両者とも、ボランティアにおいて「自分探し」が妥当すると述べている。それはボランティアによって、「その自分の位置というか、自分の

存在価値というか、存在理由とか」,「自分に自信」がつくと言うことや,「もしかしたらボランティア始めたことが自分の天職だみたいなことが、『ああ、これだ』っていうものが見つられる」と言うことに示されている。しながら二人には、自身にとっての「自分探し」が微妙な違いを見せている。それは、ボランティアに対しての生き方とも言うべきものであろう。Aさんは「自分が経験できない世界というか自分にとっては当たり前のものが当たり前でない世界」がボランティアによって展開されると言うように、自己に身近な例として「自分探し」を考えている。対してDさんは,「自分探し」ではないが「わかるような気がするんですけど」と言うように、自身にとって離れた立場で考えている。このことは恐らくは、それぞれがおかれている立場によって異なるのであろう。しかし、Dさんが「自分探し」について「今の時期、就職活動であったりとか、次のところに行く時期なので、自分を見つめ直す、自分が何になりたいのかとか、就職はどうしたいかっていう、考えるときに、やっぱりちょっと『あーどうなんだろう』と思うときがあるので、ちょっとその、わかるような気がするんですけど」と言うことは、自己物語の書き換えが近いうちに起こる可能性を示唆していると言える。この二人に見られる違いは、自己物語の現在の中心地がどこにあるのかを示している。それは「わたしらしさ」としての自己物語を生きている比重がボランティアにあるのかどうか、ということである。

## 5 ボランティアと「自分探し」の時代

もちろん、ボランティアだけが自己物語の書き換えに関与するのではなく、一契機であることに過ぎない。最後に、現代社会の特徴からボランティアがアイデンティティの確立や「自分探し」と結びついているのかを若干考察してみ

よう。現在アイデンティティの確立や「自分探し」は他の場面でも謳われている。ここでは「自分探し」のみに注目すると、例えば自己開発セミナー、新宗教、自分を見つける書籍などが「自分探し」を提供している。特に新宗教は、この「自分探し」に敏感に反応してきた。例えば、弓山達也が言うように、

そもそも宗教はこうした自分探しに応えることを得意としてきた。その中でもオウム真理教をはじめとする最近の新宗教はそれをわかりやすい形で、時には短期間かつ安直な方法で可能にすると約束し、若者の心をとらえてきた。「オウムで救われた」と、今もこの教団を離れえない信者がいる理由の一つはここにある(弓山 2004)。

だが宗教はオウム真理教による地下鉄サリン事件以降、不信感のイメージが社会から植え付けられている。もちろん、イメージであり島菌進の言うように『『宗教ざらい』がどれほど宗教の実際についての知識を踏まえたものであるのか、大いに疑問である』(島菌 2001: 18)<sup>12)</sup>。しかし今後このようなイメージを宗教が払拭することは困難であると思われる。何故なら、宗教、特に新新宗教に対するイメージは「カルト」と結び付けて考えられているからだ。その意味で、ボランティアにおける「自分探し」にはオープンさがあり、人々にとって安心した参加形態と映り「自分探し」を試みるのには妥当な一つの実践になったと思われる。ボランティアが活発になるのが、地下鉄サリン事件と同じ年に起こった神戸大震災以降であるが、それ以降「自分探し」の方向性に変化が生じたとは言い過ぎであろうか。

このように、ボランティアは「自分探し」をオープンに提供している。つまり、ボランティアには「いかがわしい」ものではなく、「気軽に」、また社会的に認知されたものとして、そして参入/脱退の自由さが認められる。このようなオープンさが、宗教に代わるものとして

「わたしらしさ」を形成することを求めている人々に対しボランティアは有効性をもっていると考えられる。この背景には自己物語を確固とするための「重要な他者」へのつながりを希求する現代の人間性が示されている。

## まとめ

以上考察してきたように、人々は自己物語を意識しているわけではないが、「わたしらしさ」とは自己物語の形式に沿っているのである。特にボランティアにおいて「わたしらしさ」の形成が見られたのは、人生の転機によって起こる自己物語の書き換えを迎えた人々であった。従って、ボランティアにおける「わたしらしさ」の形成は、自己物語の書き換えに対してボランティアが影響することがあると言える。しかしこのことは、自己物語の書き換えが必ずボランティアにおいて起こることを意味するのではない。ボランティアにおける「わたしらしさ」の形成は、ボランティアが自己物語の書き換えに対して、影響するのかもしれないのかによって決まるからである。従って、ボランティアにおける「わたしらしさ」の形成は、未確定でありボランティア自身も必ず提供できるのではない。もちろん、その目的をもって人々がボランティアに参加しているわけではないが、アイデンティティの確立や「自分探し」を求めている人々にとっては、ボランティアによってそれらを掴むことが可能であると思うのではないだろうか。

今回の調査からボランティアにおいて自己物語の書き換えを望み、その書き換えができなかった人もいることが予想される。このような人々こそは更なる「わたしらしさ」を求め、異なるボランティアを彷徨っているのではないだろうか。このような自己物語の書き換えができなかった人を視野に入れ、書き換えが出来た人々と比較することによって、「本当に」ボランティアにおいて「わたしらしさ」が形成できるのかと

いう視点を更に深めたいと思う。

## 注

- 1) ここで使う「わたしらしさ」については、2で考察している。
- 2) エリクソンには、「静態的で不変なもの」ではないという考えがあるが、これはライフサイクルを通して一貫したアイデンティティが確立されなければならないことと矛盾しない。その「静態的で不変なもの」ではないのは、例えば、青年期から成人期への移り変わりの時である。
- 3) なお、エリクソンは、「わたし」「自我」「自己」をも区別している。ただしこの三者の区別とアイデンティティの関係についても明確にされていないと思われる。これを扱った論考については、西平（1993）225ページ以降が参考になる。
- 4) また別の箇所では、次のように言う。『『自分』を他者の関係のなかでとらえながら、『自分』を大切に生きて生きる、（中略）自分が全体とかかわって存在することを意識して生きていくボランティアの思想は新鮮』である（吉村 1999：185）。
- 5) 野家啓一は「物語はもともと『語られたもの（that which is narrated, a story）』の側面と『語る行為または実践（the act or practice of narrating）の側面というヤヌスの性格を持っているのである』としている（野家 2003：54）。
- 6) 考えてみると、物語を読むという行為自体が、物語の「語り」を感じることもとも言える。物語は書き手である作者だけでは完成せず、読者も参与する意味生成の共同行為としての「出来事」の中で、「意味の発生」がみられるからである（やまだ 2000：8-9）。しかし、この場合の物語は、すでに完結してしまっているものであり、生きた物語が完結を見ないのとは対照的となっている。
- 7) 浅野は物語の第一の特徴として、『『語る』行為は、その語り手とは異なるもう一つの視点＝登場人物を創り出す』（浅野 2001：207）ということ指摘している。しかし、ここでは物語そのものの整理をしているので、除外した。この箇所は先ほど論じた「語り」に挿入すべきかも知れない。
- 8) やまだは「物語」を生きた、生の、生成する、完結しない物語とする。そして物語の最小構成要素として、「2つ以上の『出来事』とそれらをむすびつける『筋立てる』働き」としている（やまだ 2000：8）。
- 9) この段階での他者とは必ずしも具体的な他者ではない。「工夫をこらして自己物語を語ったと

しても、他者がそれを受け入れてくれる保障や根拠はどこにでもないということだ。それらの工夫はあくまでも『一般化された他者』（ミード）を想定してなされるものであり、具体的にあれこれの他者にそのまま通用するものではない」からだ（浅野 2001:172）。しかし、すぐ後で展開されているように語る段階では具体的な他者になる。

- 10) インタビューをする者と受ける側を通してこの自己物語は形成されるのであるが、もちろん、他の他者に「語る」ことによって自己物語はまた違ったものになるだろう。
- 11) Dさんは、現在娘夫婦と暮らしている。
- 12) 島蘭は、宗教に対するイメージを述べているのではない。「オウム真理教以降、『宗教ざらい』の傾向が強まっている」と捉えている（島蘭 2001:18）

## 文 献

- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」『富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界ー若者たちの東京・神戸90' [展開編]』恒星社厚生閣。
- , 2001, 『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』到草書房。
- 石川 准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』新評論。
- 井上 俊, 1996, 「物語としての人生」井上俊他編『岩波講座 現代社会学第9巻 ライフコースの社会学』岩波書店。
- 入江幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治他編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社。
- 榎本博明, 1999, 『〈私〉の心理学的探求 物語としての自己の視点から』有斐閣選書。
- エヴァンス, R・I, 1981, 『エリクソンは語る』岡堂哲雄, 中園正身訳, 新曜社。
- エリクソン, E・H, 1973a, 『アイデンティティ』岩瀬庸理訳, 金沢文庫。
- , 1973b, 『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』小此木啓吾訳編, 誠信書房。
- 大場 健, 2001, 『私という迷宮』専修大学出版局。
- 香山リカ, 1999, 『〈じぶん〉を愛するということ』講談社現代新書。
- 島蘭 進, 2001, 『ポストモダンの新宗教ー現代日本の精神状況の底流』東京堂出版。
- 西平 直, 1993, 『エリクソンの人間学』東京大学出版会。
- 野家啓一, 2003, 「物語り行為による世界制作」『思想』954。
- 野口祐二, 2002, 『物語としてのケア』医学書院。
- 芳賀 学, 1999, 「自分らしさのパラドックス」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣。
- 平群町社会福祉協議会, 2003, 「ボランティア」(<http://www.heguri-shakyo.jp/volunteer.html>, 2003.11.20)。
- フォスター, E・M, 1994, 『小説の諸相』中野康司訳, みすず書房。
- やまだようこ, 2000, 「人生を物語ることの意味ーライフストーリーの心理学」やまだようこ編『人生を物語る』ミネルヴァ書房。
- 弓山達也, 2004, 「よくわかる新宗教」(<http://my.spinavi.net/yumiyama.2004.11.21>)。
- 吉村恭二, 1999, 『ボランティアの世界』築地書館。
- リファレンス, 2003, 「ボランティアを考える」(<http://www.reference.co.jp/magazine/welfare/volunteer8.html>, 2003.11.20)。
- 若田恭二, 1997, 『終末の予感ーわれわれの時代の診断書』せりか書房。
- , 2002, 『〈わたし〉という幻想, 〈わたし〉という7呪縛ー精神病理学的政治学序説』せりか書房。
- 驚田清一, 1996, 『自分・この不思議な存在』講談社現代新書 JEUNESSE。

## 付記

本小論は平成15年度佛教大学特別研究助成（代表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（しんや まさあき

佛教大学総合研究所研修員）

（わたなべ しゅうじ

佛教大学総合研究所研修員）

## Self-Identity Formation in Volunteer Work

Shinya Masaaki, Watanabe Shuji

The aim of this paper is to examine, by analyzing the results of interview research, how people search for their identity or a sense of self and what characteristics they obtain in the case of volunteer work. It is argued that the quest for identity or self is a key element in strengthening *self-identity*. However, grasping the whole process of strengthening self-identity in detail is a difficult task. To overcome this problem, theoretical thoughts concerning *self-narrative* are reverted to and great importance is attributed to the ways of *rewriting self-narrative*, which indicate the ongoing process of self-identity formation.